

軒の下で見張る人

「もののあはれ、風雅、幽玄、位相」

上品な窓枠から見えるのは、その窓越しに洞察する、孤独で剛毅な、悲しみと未練の中で見張りをする人の姿です。

黒船が来航し太平の夢から覚めた日本は、1つの窓から2種類の文明が織りなす生活を覗いているようでした。ぶつかり合い交流しあう生活は、現実と夢の中で、またひとつの文明の絵巻を展開します。

1枚の窓の中にこれほど深い情緒があろうとは。

日本の窓は、荒れ野の中から歩いてきた、静かで落ち着いた窓です。

昔の日本式の窓は、静かな田園の志向に伴って生まれました。竹林の照り輝くもとで、庭の間をめぐる回廊の中で、カエルの声、雨音、さらさらと流れる水の音が聞こえます。最も静謐な場所で、1杯のお茶の立ちこめる湯気の中に、清く澄んだ香りが立ち上りだします。お茶と茶道は、そこで嗜んでいる瞬間の名声を残すもの。いわゆる「一期一会」はいいもので、紛争、無関心、対立をよそにおいてお茶を前に向かい合い、繰り返すことのない出会いに心を静めます。そのとき、禅の世界、天と一体になる境地、平和に収まる楽しみが、この軒の下で、窓の格子の前で、落ち着きながらも期待に満ちています。

遣唐使が唐朝を訪れ、大唐の盛んな時代の文化に直面して取り込んだものは決してすべてではありません。彼らは禅の落ち着きを選び、平板な水墨の志として、民族の精神にしまい込みました。大化改新以後の文明は、窓際に歴史のシルエットを残し、田園の牧歌的水平志向に続いています。彼らは偉大な大空を崇拜することなく、広い土地と森の中、八百万の神が存在する場所にいました。窓は自然と通じ合っていて、境界線も障害物もありません。水墨のようにあっさりとした生活の中、窓の中の清らかな心と静かさは窓の外のカエルの声や風雨の中に溶け込むのです。まるで1枚の窓のように、あいまいな日の光と月の影が付き従い、窓がないかのように、文明と自然に決して隔たりがないのです。

日本では引き戸が用いられ、防衛を重視して、次々と重なる鉄柵で嚴重に警備するヨーロッパの砦とは異なり、むしろ広くて厚い屏風のようなものです。のどかな日光、部屋を通るそよ風はいつもかすかな名残だけを残し、日本式のあいまいで柔かな審美の境地を映しだします。鬼神の平等については、多神教の日本の伝統の中で明らかに示され、窓の思想史の中で体現されています。「鬼の目にも涙」は善と悪が絶対的ではないことを信じているということであり、そのため窓の外の世界を受け入れています。窓が悪霊の入る場所とされ、極度に憎まれる西洋文化とは違うのです。

視点を変えて西洋の窓を注視してみると、宗教の文脈のもと、自ら進んで神の崇高さを離れ、冥土と鬼神の往来する場となっています。

多民族の集まるヨーロッパ大陸の中では、戦乱により自ら防御する需要がもたらされま

した。防御も窓設計の重点になっているのです。洋式の建物は崇高さを求めがちで、一方では天井に向かう上昇志向、他方では神に対する宗教的な気持ちに表れます。窓は高いところに位置して、高い所から見おろす場ともなっています。和式の引き戸と異なり、西洋のドアは多くが外開きで、敵を迎えるのに都合よくできています。守りやすく攻めにくい都市の建築設計は、総じて文明の侵略性と関係があります。近代以降、資本主義の発展によるプライベート空間に対する要求が、部屋の設計で体现されています。西洋の窓は狭いプライバシーの窓口となり、窓の内から外を見下ろすことはできても、窓の外からの視線を遮断します。一方の小さい窓から、このように外を見ても、窓から外の世界とは隔たりがあり、人と人の互いに通じ合っていない悲喜を静観するようなものです。

黒船来航で夢から覚まされ、田園の障子が粉碎されたかのように、近代的を象徴するガラス窓が、維新の中で盛んになりました。

ガラスの製造技巧を学び取った日本人は、「和魂洋才」で鑄直しました。透明なガラス材を窓に応用し、窓の外の世界に対する透徹した洞察をもたらしたのです。近代化の発展、建築構造の更新により、日本社会の垂直志向が啓発されました。摩天楼のような空まで延びる様式が、西洋文化の精鋭としてそれまでの田園や郊外、一般庶民の生活にも飛び込んだのです。透明な窓、流線型の窓が、電車と鉄道、スピード、効率、近代化した生活に伴って、20世紀の日本を昂然と闊歩し、縦横無尽に突き進みました。

現代化はいつも落ち着く余裕がなく、文化財の廃墟の中で、粉々になって困惑した国民精神が隠れているのです。摩天楼と透明なガラスが社会生活の姿を変え、日本のもともとの文明はどこに置くべきなのでしょう。

日本は明治維新を号砲としてある解答を残しました。西洋化と現代化は真っ青な背景色のように扱い、もともとの文明がより純粋なシルエットを描き出したのです。

摩天楼の崇高さを仰ぎ見ても、田園の景色の安らぎを懐かしむことに差し障りはありません。西洋の文字の国際習俗が流行っても、茶道の芸術の落ち着いた静かさは体得できます。戦争のロボットのような侵略でも、ついには異なる文明に対して敬意を抱きました。科学技術の疾走はいつでも心の冷たさを伴っていますが、禅の知恵があり心の癒やしを体得して……千三百年前に創造されたかな文字のように、「国粹文化を栄えさせ、新たな知恵を溶かし込んだ」後また原生となった文化のように、新たな彩りを放っているのです。

文明には文明ごとの彩りがあるものです。しかし彩りが見られず、潮流に遅れると、文明の遺失と苦痛を伴います。無数の血が流れる大地をじっと眺めると、戦争も、紛争も、誤解と侵略もそうです。

世界の各民族の中で、文明の痛手を治すどんな良薬を探すべきでしょうか。

世の中に一期一会の茶道があって、世界の文明間の誤解と紛争をほどこますように。

世の中に水墨のように淡い文学があって、もののはれや幽玄のひとときを伝えますように。

軒下の窓が、平和な世界になって、純粋な瞳になりますように。

読んだ本のタイトルと参考文献

「窓」の思想史：日本とヨーロッパの建築表象論 浜本 隆志著